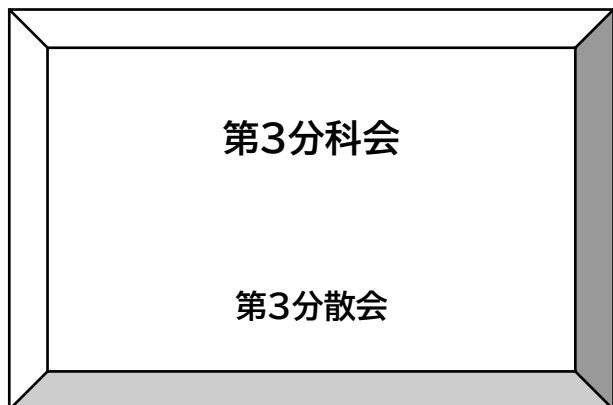




I はじめに

分散会基調は、大会の基調と討議課題をもとに提案された。初めに、報告協力者から進路保障は同和教育の総和について、学校現場の現状と重ね合わせて提起された。その後、討議の柱や分散会の進め方が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

ー報告1ー⑨

Aの学びと進路保障をめざして（福岡県同教）

ー主な質疑と意見ー

奈良 綴り方の報告でしたので、1つご質問させてください。私も本校で人権教育推進担当しています。Aさんの綴り方そのものを周りの子どもたちに広めていくとか、ほかの場面でこう紹介していくとか、そういった場面があったのか、そして、それによって何かAさん自身に変化があったのか。そのあたりあれば教えてください。

報告者 生活綴り方については、私も最初は分からない状態でした。まずやってみようということで始めました。そのきっかけとなったのが、この築城町同研の中で、三重県の伊賀市の方にzoomでお話をいただきました。それ以前は、私も、生活綴り方っていうのは、言葉は聞いたことありましたが、どんなことをしているのかっていうのは、わからなかったです。そして、お話を聞く中で、これは、ちょっとやってみたいな、やってみようという思った次第です。それで、やってみようというのが、これは、Aにとっては、とてもいいんじゃないかなっていうのが、1つ、ありました。それで、まず、Aと生活綴り方というなですね、一人ひとりに対して始めた、そういうものになります。それで、この綴り方を紹介する場面、子どもたちにあった

のかっていうと、これはありませんでした。先ほど先生が言われたように、その綴り方、生活、綴り方をして、それを子どもたちと共有するっていうのも大切な活動だっていうことも話を聞いたことがあります。ただ、そこまでは今回の私の取り組みの中ではできていません。ただ、Aがこの綴り方を通して、自分の暮らしのほんのほんとかちょっとしたことでいいから、立ち止まって、Aの生活を振り返って、Aの生活の中にこんな楽しいことがある、こんな嬉しいこと、またこんな悲しいことがあるんだっていうことに気が付く。そしてそれを事実として綴っていく。それはAにとっては価値があったのかなって思っています。すいません、共有することまではできていません。

香川県 報告ありがとうございます。最初にですね。Aさんが、自分の意見をみんなに伝えることに対して、少し苦手な面がありますとっておられました。この綴り方を通して、自分の生活を見つめ直すなど、自分の思いとかを書くこともできるようになったのかなと思うのですが、その自分の意見を人に伝えるとか、他者とのコミュニケーションに関して、Aさんに何か変わったことがあったら教えていただきたいと思います。お願いします。

報告者 Aは、先ほど申しましたように、自分の意見を述べること、話すことが苦手なところがあります。ありました。綴り方を通してと言われればどうなのかなっていうところもあるのですが、6年生、先ほど言いましたように、とてもみんな優しい子です。その中で生活していく中で、私も時々授業に入る、5年生の時は入っていて、6年生の時はちょっと入ってなかったのですが、その中で見ていくと、友だちに自分から話しかけるっていう場面は少なかったです。どちらかというと周りの子から、女の子4人ですけど、周りの子がAに対して色々話しかけてきて、そしてAもそれに対して話す、そのような感じが多かったかなと思います。6年生後半になって、やっぱり高学年になると結構しっかりしてくるので、学習中にも教え合いとかをですね、グループでやるとか、そういう時には発言はしていたかなと思います。ただ、この学習会のこと、それから生活綴り方のことも含めてですが、子どもたちに話したとか、そういうふうなことはなかった、と思っています。ただ、担任と2人きりになった時、その担任には、学習会で今日先生こんなことしたんよっていうのを伝えていました。今日、お菓子食べたんよとかですね。そう

ということで、学習会今日あるんよとか、そういうことは他人には話していたと聞いています。誰にも話さないというのは 1 番良くないと思うんですが、担任がそういう受け皿ですかね、お話を聞いてくれる。

A にとっては、それは安心できる人だった。それは 1 つ良かったのかなと思います。こどもたちにはなかなか学習会のことなどは話せなかったということがありました。人に伝えるっていうのも、こどもたちの中に伝えるっていうのも、以前に比べたらできるようになったかなと思うんですが、それが、綴り方がどこまで関連していたかっていうのはちょっとすいません、わからないところがあります。

福岡県 学習会についてちょっと補足させていただきます。隣保館で 1 家族の補充学習をやっていました。その後、ぷつぷり切れで、活動もなくなり、学校と地域との関係というのが、ほぼ全くとっていいほどなくなり、地域の現実さらに部落問題についての学習っていうのは学校から消えかろうとしていました。そういう中で、地域のお母さんが、当時中 3 でしたけど、上のお子さん 2 人いるのですが、支援学級だったり、特別支援学校に進学したりということで、普通高校に進学するそういう情報が全くないんですと言われていました。それが何度も何度もこう相談が持ちかけられて、地域の方に相談しまして、じゃあもう進路保障のための学習会を始めよう、ということで 3 年前に決めました。ただ、場所の問題もありましたので、町の人権課に掛け合って、隣保間事業の識字教室として、場所をおかしましようってことで、そういう段取りがつかまして。ちょうど地域に 4 人のこどもたちがいましたんで、保護者を通して呼び掛けて、4 人でスタートした次第です。その間、10 年ちょっと解放こども会とか補充学級ができていなかったの、本当に手探りの状態で始めたところ。ただ、その存在を学校の中で明らかにすることで、やっぱり学校の中に地域の子がいるんだと、地域に被差別部落の子がいるっていうことがきちんと伝えられるようになったことは、すごく大きいのかなと、再建しているような状態ですけど、ささやかですけど非常に大きな取り組みで、その中の大きな実践だと思っています。

協力者 先ほどありましたように 1 度途絶えたものを復活させるエネルギーっていうのは、先生方もご存じのように、かなりエネルギーがいるんですけども、その中で、教職員が集まってですね、この

想いを、特に、報告者の方を中心に、復活させたいという思いがこの A さんとの向き合い方も含めて、活動につながったのではないかなと思っております。

兵庫県 今年 70 歳になりましたが、1997 年に高知全同教で自分の中学校での取り組みを発表したその子が今年 42 歳になります。長らく連絡がなかったが電話してきて、元気かって、先生、校外学級でな、やっぱりムラのことちゃんと話せなあかんって、よう言っていたなって。何が言いたかったって、最後の方の報告の中にある綴り方で、お母ちゃんにしたらきつかったんだな。その階段の下で言っているセリフがこの子の耳に聞こえた時点で、あ、お母ちゃんのしんどさ、この子わかってきている。お母ちゃんの変容というよりも、この子の変って大きかったのかな。報告者の方が出会ってくださったことで、この子が今度同じ学習会でやっぱりリーダーになってほしいし、なかまづくりやってくれる 1 人になってくれたらいいなと思って、もう今年最後の全同教やと思って兵庫から来たんですが、そんな昔を思い出しました。

奈良県 お手紙を預かってきましたので、ここでご披露というか、ご紹介をさせてください。代読でさせていただきます。全人教には 30 回以上参加してきました。全人教は、こどもたちの事実を語り合い、教育のありようをと問い合う、日本の誇るべき教育遺産だと思っている 1 人です。今回、こうしたお手紙の形での参加は初めてです。今回は参加が叶わなかった私の古くからの友人から託されたものです。なぜこのようなお手紙をお届けしたのかと申しますと、不思議なご縁で 10 月、11 月と福岡県の築城地区の皆さんと学び合う機会を頂戴したからです。レポートの内容は、まだまだ不十分な点はあります。しかし、かつての学びの宝庫であった同和教育補充学級の遺産の継承と再考を目指すものとして注目してほしいと願います。学校以外の地域における居場所づくりを公的にも保証しようという視点は、全国的な不登校の実態は見るまでもなく大事だと思うのです。さらに、そこに生活綴り方の手法を取り入れようとなさったことも素晴らしいと感じます。今日、教育と生活が切れてしまっているように思えてなりません。生活こそ学びに溢れ、生きる土台をなすものとして、綴り方運動は歩みを刻んできました。その際、ある日、ある時、あるところでの 1 つのことを順序よく思い出して過去形で書く展開的過去形、事実を基本

に据えることも忘れないでほしいと思います。伝統ある福岡県同和教育運動の営みが息づいていると感じています。レポート聞かせていただいて、自分も若い頃に同和教育補充学級に通っていた1人として、今なら、なかなか放課後学習会として成立しているところがほんとにこう少なくなっている中で、先生の思いから、あるいは生徒たちの、あるいは地域の思いから、取り戻しをしているという報告を聞いて、身の震える思いもしながら、もう1回その視点も入れて、目の前のこどもたちと向き合わないといけないなということも感じさせていただきました。

報告者 zoom でつないで、学習会をしていただきました。その中で、同和教育とはなんぞやというところからですね、しっかり話をさせていただき、また、この生活綴り方のことも、より詳しく私、ほんとにやってみようということで、やっていたところに、色々な学びを与えてくださいました。また、これからも学び続けていきたいと思いますので、また、よろしくお願いします。と伝えてください。

兵庫県 お話を聞いていて、こういう熱い、あったかい関わりってやっぱり大切なんよなと思いながら聞かせてもらいました。その中で、意見というか、ちょっと悩みをちょっと聞いてみようと思っていたのですが、先ほど、今Bという子がいて、でも担任が12月になっているがまだ来てないです、という話があったじゃないですか。僕は今、特別支援学級の担任で、通常学級にいる子たちを、いろいろな子たちを見ているけれど、担任の先生にとか、色々思うのですが、報告者は、その、今来てくれてないAさんの担任の先生に本当はどうしてほしいなと思っているのか、これから報告者はどうしていくのかなっていうのを僕は気になっています。ここで何もしなかったら、広がらないのかもと思っています。僕もこれからどうしていったらいいのかっていうのをすごく悩んでいたのも、ちょっとご助言いただけたらなと思います。お願いします

報告者 Aさんの担任も普段忙しそうにされていて私もそれ以上言うてはいません。ただ、来てほしい、来ていただけたらいいなというのは、正直あるわけです。他の先生にもやっぱりそういうのを分かってほしい。そういうのを広げていくっていうのは大切なことだと思うのですが、まず、私は学校の前の掲示板ですかね、そこには今日学習会って書いています。そして、それを見てくれた先生、

分かってくれているって言ったんですが、気にかけてくれている先生は、来ないんですけど、いつてらっしゃいという声を掛けてくれます。やっぱりいきなり一気に広げるっていうのは難しい。まずちょっとずつ足元からっていうか、そういうところからやっていく必要があるのかな。これは、先ほど先生は特別支援学級でと言われた、そのこととも共通しているのか、と思います。もっと言えば、他の同和教育に関してもそういうことは言えるか、と思っています。地道な取り組みがまずは、いるのかな、と思って私は活動しているところで、それが広がっていいかなとは思っています。

奈良県 前回、綴り方って、最初、教員採用試験の教職教養のテキストで聞いていた程度だったんですけども、私は夜間中学で、地域のクラスの生徒さんの担任をしております、ちょうど、60代から70代の生徒さんが、作文を書くっていうことをやっていたんですけども、やっぱり、作文に生活を綴るっていうことが、どれだけエネルギーのいることかっていうのを感じながら、お話を聞きました。学習会っていうのは、先ほど、先生方もおっしゃっていたように、つくる、ということもだいが時間をかけてっていう流れだったんですけども、それはやっぱりこどもの時だけではなくて、大人になってから、何歳になってもそういう学習会っていうのは永久に残るものではないかな、と感じさせていただきました。また、生活綴り方のお話をお聞きできて、本当に大変ありがたく思います。また学校現場に還元させていただきます。

－報告2－⑪

「家族以外と会話する機会を頂きありがとうございます」 （奈良県人教）

－主な質疑と意見－

奈良県 報告者の日々の家庭訪問や、子どもとつながる熱心な取り組みがあったからこそ、こどもがみずから、アルバイト先を決めるという意思決定ができた、そこにつながったかなと思って、とてもいい取り組みをされたと思ってお聞きしていました。質問ですけれども、私の学校の方でも、長欠とか遅刻っていうのが、かなり人数が多くて、大きく課題になっています。そこで、ケース会議とかもしているのですが、なかなか各担任によって、家庭訪問、熱心に行かれている先生もおれば、必要最低限の連絡ぐらいでとどまっている、しまっ

ている方もいて、なかなか足並み揃っていないという状況です。先生のお話の中で、ほとんどの担任の先生が同じように家庭訪問されていたという話をされていたと思うのですが、進路・学力保障の理念共有や、みんな同じ方向、足並み揃えて向いていくために、何か職員の中で取り組んでいることなどがあれば教えていただけたらなと思いました。

報告者 家庭訪問が大事であるっていうことは、みんなが共通して考えていることです。今ではもう確かにこう職場の中でも温度差があって、ほんとに電話だけで済ましている方もいて、もう自分が信じてやることは、もうその時、その時でも一人ひとりにとってベストやと思うのでやっていることで、自分が所属している学年なんかは多く行く方ですし、その背中を見て、行こうって思っているなかまもいます。若い先生方の中にも、先生がやっているようなことを、自分はわからないから同じようにやってみようって思って 実践されている先生もいます。ベテランになってくるとやり方がこうわかってくる。そこには多分僕のレポートにあるように傲慢さがあるのではないかなって思ってしまう。自分はできているぞって思うから、家庭と繋がれているぞって思うから、電話で済ましている。そんなとこないかなって。そんな時には僕はちょっと一声かけに行くのですが、ですが、あの先生がやっている、この先生はやってないとか、そんな見方をする地域ではないので、その時、その時でその人が行うベストを尽くしてやったらいいのかなと思うので。いいなと思ったらやったらいいし、やるべきと思ってもやったらいいし、いらんからやらないは、ないかなと思うし、やるべきことをやる。というのが、我々が一生懸命にすることが、多分こどもたちもそれをこう学んで、やりたいことばっかりやるんじゃないくて、やるべきことをやるっていうように一人ひとりが育っていくのかなって思います。ちょっと答えになっているかどうかわかりませんが、現場が難しいのは多分どこもそうなのかなって思っています。

福岡県 どこかのタイトルが家族以外の会話をする機会と書いていますけども、先生以外で、学校の中でこの Aさんと繋がっていた方、または学校関係者以外で、地域の方も含めてですね、なんかこの Aさんと繋がっていたような方がいられたのか、もしおられるなら、その方と先生がどう繋がっていたのかというのを聞きたいです。もう 1 点は、

途中最初の頃は放課後登校や部活動というようなことも書いていますので、Aさんの周りのなかまというか、同じクラスや同学年の生徒たちの中で何か繋がりがあったら教えていただきたいと思いました。よろしくお願いいたします。

報告者 Aは学校へというか、家も出なかったし、部屋からもなかなか出えへんようなところがあったので、おそらく地域の繋がりは少なかったかなと。ちょうど Aの隣の家も在籍している生徒の子の家で、そこのお母さんはたまたま私が大昔に教えた教え子でして、あの先生、全然見ないけれど、学校も来てないって。私も全然見ないというぐらいのものなので、おそらく中学校 3 年間はほぼ出てなかったかな。また、お母さんからの話も聞きながら、全然どこも行かない。本屋に行くでもなく、本当に家から出てないってような生活を送っていたようです。周りのなかまですけども、これもなかなか難しく、1 年生の時は、おそらく幼馴染であろう子が一緒に来てくれていたのですけれども、その子と、がっつりなんか繋がってやっているのかって言うとそうでもない。もう僕が持ち出さそう、3 年生の時にはお母さんと本人と 3 人で交えて話しているのですけれども、もう顔も忘れてしまい、名前も忘れてしまうようで、それは嘘かほんともわからないし、そんな子おったな、とか、もう顔も出てこない。何々くんやないか、と言って、お母さんが「幼稚園から一緒だあんた」って言っても、わからないみたいな、そんな様子でした。それで、関わりというか、繋がりというか、Aもやっぱり学校の匂いを常に嗅いでほしいし、教室のなかまも Aのことは常に頭に入れて、存在をしっかり知っというてほしいし。ということで、私が途中で言ったその日直カードがこれです。ルールも決めながら、自分の名前をフルネームで書きます。それで、大きさとか色とかなんやいろんなことはもう気にしない、とにかくルールとして縦書きで吊るしていくのですけども。縦書きで名前を最低限フルネームで、漢字でも書ける人は漢字で書こう、と言っきます。その日の日直の仕事で、ちょっとしかないですけども、朝の会終わりの会の司会と 学級に書くことぐらいかな。これを 2 人でやって、後の仕事は班の仕事に割り振ってあるのですけれども、常にこう、教室の前に、前の黒板の横に、かけてあるのですけど。今日はこの子が日直やっていう存在を常に、それも 1 つ、Aの名前がクラスにある 1 つかな、朝から来てなかったら回します。ペらっ、

と次の人に朝の時点で来てなかったら日直次回だな、と言ってやっていくのですけれども、必ず 1 周回るまでどこかで A の名前はあるし、もちろん毎朝の出欠確認でも今日も休んでいるな、とか言いながらやっているの、存在を知らない子はいなかったかな。ただ、小学校 2 つあって、1 つに上がってくるので、ほぼ見たことない。ただ、名前を知らない、という子だけはいなかったかなと思っています。それぐらいの関わりしかちょっと持てなかったかなってところで。あとは周りのなかまの様子ですけれども、「先生、私らも一緒に家庭訪問行っていい」っていう子も中には何人もいて、いきなり行くと A は絶対出てこないの、一旦聞いたり、その学校の様子を家庭訪問した際に伝えたり、こんなこと言ってくれている子がいるけれど、一緒に来たらいかんかと言ったら、その辺の返事はずっとノーでした。うん、それはいらんっていうようなことを言うので、いらんことを無理やりできないので、そんな様子やったかなと思います。この最後のその卒業文集の 1 ページを A の部分をやってもらう時も、「先生、これも一緒に持っていきたいし、自分らだけ行ったらいいけん」とか言ってくれたんやけれども、それもちょっと叶わず、結局僕がこうやり取りしていたのですけれども、ただ、これを書いたことを、僕これ思った時ももう涙出そうになりましたが、それはちょっとおさえて、あの教室へ持って行って書いてくれたら、すごいやん、と言ってね。あの教室の誰もがびっくりしていました。みんな印刷して、1 人 1 部冊子として持っています。周りのなかまであるとか、地域とのつながり、学校以外とのつながりというのは、ほぼなかったようなところですよ。

滋賀県 2 つ質問あります。1 つは、涙ながらにお母さんと本音を語り合ったっていうところがあるかなと思うんですけれども、お母さんの思い、ご家族の思い、こういったところがあったのかなということをお聞きできたらなと思っています。2 つ目は、このご家庭や地域、私も分からないところがあるんですけれども、部落差別の背景があるのか、そういったところも、お話付け加えていただけたらありがたいなと思っています。よろしくお願いします。母の本音、思いと、この地域に部落差別の背景があるのかという 2 点、お願いします。

報告者 母の涙の本音、おそらく途中で原稿の中にもあったと思うんですけれども、経済的にしんどくないのに家にいるのがいらんというか、パートに

出ているのがそういうとこやった、という思いはあります。これはお母さんに直接そんな話をしたことがあったわけではないのですけども、私が感じたところです。あと主には、半分はこの子だ。いまいい、大丈夫かな。これから先どうしていくのだろうっていうのが半分。それともう半分はお一人で悩んでいるかな、と思うようなことがたくさんある。やっぱりお母さんの話の中から、お父さんはもう結構ほったらかしなので、興味ないぐらいほったらかしなところがあってっていうところかなと。また、お母さんはお姉ちゃんもそうやって妹も出てきたと思うんですけど、妹はこの時は小学校 5 年生で小学校によく通っていました。その時はお兄ちゃんとお姉ちゃんみたいにならないと言っていたのですけれども、今は現在中学校 2 年生で同じような状況です。僕もたまに A の家にはまだ足を運びに行くのですけど、妹はどうしているの、って聞くと、あんまりそのことは教えてもらえせん。なんか自分ができることあったらいいのにと思いながら、妹の担任もよく行ってくれているみたいですけど、なかなか会えないっていう言ってます。お母さんは、不登校の子、親に、不登校の子を持つ会みたいな感じの名前やったかなと思うのですけど、そんなサークルとかにも参加していて、今も多分参加していると思うのですけど、そういうところで、元気もらったり、ガス抜きしたり等々は、していると思うのです。A が、自分の進路選択をして、1 年半ぐらい経った頃、家へ寄った時に、家から出るというのが、すごく嬉しかったみたいで、「先生まだずっとバイト行っている」と聞いたので「よかったですね。ちょっと今いないから、また来ますわ」と言っていたんです。ちょうど 1 年半ぐらい経った時かな、去年の夏ぐらいには、「先生、この子、こんで大丈夫やろか」っていうような、またちょっと、不安に駆られているような様子もあって、「こんななんもあってもいけないけれど、女の子は大丈夫や思っています」というようなところが、お母さんにあった。女の子はなんとかなるみたい。だから、姉ちゃんと妹の時にはこんなに悩まなくてよかったけれども、A は男やから、このままで大丈夫なんかなっていう思いはまた出てきているみたいです。色々話しながらお母さんを励まして、ガス抜きもちょっとしつつ、話しながら元気づけて帰っていく。「なんかあった時にはいつでも連絡ください、いつでも寄らせてもらいます」と言っているのですが、それがハードのちょっと関わ

りのの中の話かなと思います。あと、部落差別の背景ですけれども、同和地区を含む本校ではありますが、部落差別の背景はこの A に関わってはないかなというところはあります。

滋賀県 僕も教師初任の時なんかあったらすぐ行けという 10 分ぐらい電話していたら、もう回線をガチャって切られてしまいました。先輩に行ってこいって言われて育ってきたものなので、家庭訪問は空気を吸うように行っていくのをすごく共感して、今の僕の学校にもこの長瀬先生の熱い部分を持って帰りたいなと思っております。今、僕、中学校の方で校内の教育支援センター、いわゆる適応指導教室の担当をしまして、本校、1000 人規模の学校ですが、今、全欠は少ないですが、その適応指導教室、定員 8 人ですけれど、26 人という定員オーバーの状況で、かなり不登校、不適応が多くなってきている現状です。その考えた時に、先生もおっしゃられたように、50 人いれば 50 通りの取り組みがある。一人ひとりをきちと背景をつかみながら関わっていくってということで、教員への支援っていうのが非常に重要だなというのが、改めて感じさせていただきました。ただ 1 つ、その子への支援というところと同時に、やはり先ほど奈良の先生もおっしゃってくださっていましたが、学校がほんとに 集団というところで、どんな場であるのかっていうことを改めて今問い直していかないと、多分持たないなと考えています。うちも部屋がパンクしているように、これ以上増えれば、人の支援が全然回らなくなっていくますし。やはり教室、行きたくなる教室ってどんなところだろう。本校は、校長の方も人権教育に熱心で、嫌いでも仲間っていうのを打ち出して、まず教員とこどもたちの関係性から変えていこうということで、教員が自分の思いであったり、自分の生い立ちであったり、自分の弱い部分をさらけ出しながら関わるということをして、その中でこどもたちがしんどい生きにくさを語れる繋がりを 3 年間かけて作っていこうという取り組みをちょっとずつ今進めているところです。そんな教室を、やっぱりこの全実況の場で、どんな集団を作るのか、どんな居場所を作るのかっていうのは一緒に考えさせていただけたらと思っています。

「一日目の総括討論」

福岡県 綴り方に関わって、総括討論に参加しま

す。自分が、小学校 5 年生の時に、仲間はずしを学級で受けて、それから、寂しい思いをしてきたんですけれども、同和教育に出会う中で、自分の差別性と向き合うようになりました。同時にですね、自分の生い立ちを意識するようになりました。小学校の高学年で、友達が、その墓参りの話をするんですね。が、お彼岸の時に。それを家に帰って話をすると、親はとても嫌がりました。うちは墓参りは、いかなのかという話をするとですね、そして、この話はしちゃダメなんだという自分は思いました。それから、小さい時に、母と祖母がよくいがみ合っていましたね、もう、家の中が険悪な雰囲気だったことを覚えています。同時に、両親、そうですね、両親と祖母は、人との繋がりとかがですね、ふるさとのつながりとか、そういうものを切ってきたのですね。具体的な話があるんですけども、そう自分は感じてきました。で、自分が仲間外しをされたことも含めて、ずっと、私は、なんか、寂しい思いを抱えて成長してきました。でも、同和教育と出会って、自分の差別性にも向き合わざるを得なくなったわけです。今から 35 年前の全同教広島大会で、生活綴り方に出会いました。竹細工という綴り方で。私は小さい時から作文を書くのがとても苦手で嫌いでした。でも、綴り方は違っていました。あたかも自分がその場にいるような感覚になって、自分の知っている作文とは明らかに違うというんで、惹かれていきました。そして、自分の生い立ちをずっと綴りました。その中で、私の連れ合いもずっと親とのことを綴っていったんですけども、自分の親が、そして祖母が、ふるさとのつながりや親戚とのつながりを切ろうとしていったんじゃないくて、そう仕向けられていったんやなっていることに気づきました。で、そうは言っても、自分の差別性がすぐに払拭されるわけでも何でもありません。学級担任として、どうしてこの子はこんなにあるのかなっていうふうに思ってしまうことがありました。で、その子と放課後残って思い出直しを一緒にやっていく中で、その子が、かけっこ、という内容を綴ったけども、自分はこの子のこと、なんもわかってなかったないうことを突きつけられました。その子自身も、自分のことをそうやって文章に残していく、したために、それをとっても喜びました。クラスのこどもたちの前で それを読みました。綴り方に出会って、私は重いことや苦しいことや辛いことをずっと書かせようとしていたのです。でも、違っていました。それぞれができるようになるために

は、それを共有できる学級集団にしていこうためには、まずは子どもたちが笑い合える、笑いの共有がそこにあるのかどうかということを問われました。ただ面白いから笑うとか、そういうことでは決してありません。笑いの共有の生活、綴り方があって、その上で、苦しいことや辛いことや、それも学級の中で吐き出せるのです。そのことに気づかしてもらいました。今はですね、特別支援学級の担任をしています。その中の1人、1年生の子ですけど、こんなこと書きました。僕は、みかんを食べていました。ばあばの携帯が鳴りました。ばあば、あはは、とわらいよると言いました。携帯をもらいました。ママは、金曜日、公園に行きました。行きたいと言いました。僕は、いいよと言いました。僕は、嬉しくて泣きました。そのあと、金曜日、僕は寝ていました。起きたら、ばあばが、洗濯物に名札がついちょうと言いました。僕は、忘れちゃったと言いました。洗濯に、洗濯機に名札をつけたまま入れました。ばあばは、うふふと言いました。僕も、えへへと言いました。名札が濡れていました。シールが取れていました。お気づきのことだと思いますけども、お母さんと離れて暮らしています。祖父母が育てています。寂しい思いを抱えています。けれども、こうしたことを綴ることによって、自分の暮らしが決して社会意識にネガティブなものとして取り込まれる、そうではないんだと、そこを反転していく力があるんだということを僕は綴り方を感じています。子どもたちにも、そうやって社会意識に取り込まれるのではなくて、それを跳ね返していく、そういう力を つづけてほしいし、自分自身もそういう生き方ができればいいなというふうに思っています。

福岡県 私も大牟田の産炭地で育ちました。囚人労働や与論島出身の労働者や多くの外国人労働者の方々の中で私も育ちながら、私、小さい頃から、あそこは怖い通らんがよかよと言って、それが差別だと気づかずに大学まで過ごしました。大学になってそのことに気づかされました。本当に何をしていたら、私は。小中学校の時、なぜこれが差別だと気づかなかったのか、本当にそのために、今、大牟田で子どもたちに差別のことをきちんと伝えなくてはと思っています。子どもにとって、私、学校って何だろうといつも思います。同じ地域で同じ時を過ごす、さまざまな生活を持っている子どもたちの、同世代の仲間とつながるための場所だと私は思っています。今不登校が増えて

いるということですが、これは逆に、反対に、同じ地域の同じところに住んでいる、同じ時間を過ごさなければならぬ子どもたちが切れているのではないかとずっと不安に思っています。私は今支援学級のこどもを担当しているのですが、福岡県でも支援学級がここ10年あたりに3倍ぐらいに増えています、多い学校ではですね。20学級も支援学級がある。ちょっと困り感がある子を全部支援学級の方に送り込むじゃないですけど、私はもう原学級になるべくこどもと参加しながら、そこが自分の学級という形でしようとしているのですが、そうではない動きがたくさんあります。つまり、同じ時期に同じ時を過ごさなければいけない子どもたちがばらばらにされている。しかも、何か学校スタンダードが、学校の決まり、学校スタンダードが本当にそれから始かれるこどもたちは、全部もう支援学級でいいや、みたいな感じで、どんどん切られています。やはりこどもたち、不登校になるのが私は当たり前じゃないかなと思います。じゃあ、どうしたらいいのかということで、私、先ほどの福本さんの話ですけど、私はずっと教員になってから、その大学の時に会った綴り方で今もこどもたちに自分の生活を綴って、それを読み合うということをずっと続けてきました。これがこどもたちをつなげる、私は、大変だけど手取り早いあれじゃないかなと思い、こどもたちが、最初は、小学校一年の子は本当に識字学級と一緒に字を書けないこどもたちがいますが、言葉は持っています。昨日僕は、昨日僕はお姉ちゃんが御飯をつくりましたというような一文を聞くと、ここはお姉ちゃんがつくっているとか、昨日晩御飯食べませんでしたとか、昨日はお父さんとお呂に入りましたとか、そういう一言一言で彼らの生活が全て見えます。気になるこどものところには、家庭訪問をしますとその過程が見えてきます。こどもたちが言った一言の重みが伝わります。それをクラスで共有すると、おばあちゃんがいるのだとか、お姉ちゃんのご飯つくっているんだとかいうことを共有することで、こどもたちが仲間意識が少しずつできていきます。そういうふうにしてこどもたちをずっとつづらせた中で、おばあちゃんから育てられたこどもが2年生の時に、お母さんと本当のお姉ちゃんに会いたいということを綴ってきました。この子は、おばあちゃんがもう大分お年でしたので、お父さんがやっぱりちょっと発達障害っていうこともありまして、中学校になって、不登校になり

ました。中学校になって不登校になって、その後どうしたかなって心配していましたら、自分で選んで、定時制高校に行っていました。その定時制高校の先生から、ちょっと先生、なんか、人権学習の話をしてと言われて、私は、することはないと思いながら、私の生い立ちのことをずっと話してきました。うちの娘が重度障害児で、本当全くの重度障害児で、食べることも排泄も歩くことも喋ることもできないんですが、その子を育てながら、私が教員でいることの意味とかを考えながら 自分のことを話したんですが、私たちは、私はこどもに伝えるというよりも、こどもから元気をもらいました。というのは、うちの本校でほとんど小中学校、全欠のこどもが定時制にいるんですよ。そして、毎日休まず学校にニコニコやってきて私の話を聞いてくれました。もう聞いてくれるというのは本当に皆、本当びっくりしたのですが、私は、教育の中身ってというのが、彼ら全欠のこどもが選んだ教育の中身が定時制高校の中にあるんだなというふうに思いました。こどもたちの居場所がやはりそこにあって、こどもたちが必要だと思う教育がそこにあるんじゃないかな。定時制の先生に話したら、ひきこもりやほぼ不登校の子が多いそうです。ほぼ不登校の子がなぜ定時性に毎日元気に通えるのかという話をしたら、やはりそこで仲間ができることと、それとあとは先生たちの寄り添い方ですと。先生たちが「引きこもらないでアルバイトせよ」「きつくなったらいつでもやめろ」と言うそうです。もう無理して働かんで。でも、辞めたくなったら辞めていいから、また次の仕事を探せ で、人とかかわることはやめるというふうな、そういう話を聞いて、私がやっている、今小中学校の義務教育の中身が、もう少し何か、こどもたちの本当に何か生きていく、社会の中で、地域の中で生きていくつながりをつくるか、教育の中身をつくるにはどうしたらいいんだろうかというふうに考えました。私がずっとやってきた方法で、こどもたちがそのあたりはちょっとつながることはできるんですが、それが、中学校、高校になかなか 行かないんですが、同窓会があったりすると、先生がああとき一生懸命書かせてくれたことが自分が自分の意見を整理するときに役に立ったとかいうふうに卒業生が言ってくれたりします。一方、何か私たちが不登校が多いこの状況、つながらないこどもたちをつなげるときに、やはりつづり方というのは何か私は大きな意味を持っていくんじゃないかなと思います。

兵庫県 不登校の子に関わる関わり方として色々挙げてもらっていたので、僕も一例を出そうと思います。僕、先生やっていて、こんな関わり方もあるんだっていうのを今年気づいたんですけど、昔は僕も先生なんだからこどもに何かをできるようにさせないといけないと思ってずっと関わってきていました。なので、今もその子には、今 6 年生ないですけど、その子は 4、5、6 と支援級で関わっていて、4 年から変わってきているんです。その子のお母さんに報告するときにも、校外学習を行った後には、最初はこう、なかなか参加することはできなかったけど、ちょっと時間が経って、声をかけてやっていたら、お昼ご飯は食べられるようになりましたよという報告をしていたんです。ある時、お母さんとちょっと別件で、うまくいかなかった時に、お母さんが学校に伝えたのは、僕は間接的に聞いたんですけど、なにになに出来なかったけれど、これできましたよ。できなかったなんて聞きたくないって言われて、僕はこうできたことを伝えたい、もうこれができたよっていうのだけ伝えなかったのに、そんなふうにごう伝わっていたっていうのも思って。そこから僕はちょっと反省をして、その子がとにかく楽しく過ごせるようにしたいなと思って、関わりを変えました。今はほんとにその子の友達みたいな感じになっていて、ほんとに先生の時もあるし、ほんとに友達の時もあるっていう感じですけど、でも、その結果、その子は元々 3 年生までは学校にほぼほぼ来られなかったし、家でもすごく暴れていて、お母さんもすごく苦労していた。5 年生の頃は交流学級に 1 日も行けなかったし、という子だけど、今はもう毎日学校に来ているし、朝からは難しいんだけど毎日来ている、嫌なことも流せるようになったし、すごい笑顔が増えて冗談も言えるようになったし、っていうところがあつたのです。だから、なんかこう、先生だから こうしなくては、という固定概念が外れたのは僕は良かったと思ったし、友達みたいに関わるっていうのもなんか こどもにとって、その子にとっては良かったのかなと思ったので、1 つ例として話させてもらいました。

滋賀県 不登校に関わって 2 つのレポートがありました。一昨日、滋賀県人教の方では、高校連携といって高校の先生方に集まっていたいて、研修の場を設けました。その内容が、高校生で、不登校やった生徒、今はもう成人を迎えているのですけども、その本人に、ちょっと、当時のことをしゃ

べってもらった研修を持ちました。で、その高校生は、高 2 で退学をして、転学することもなく、1 年間ぐらい、ちょっと休憩、エネルギー貯める時間を設けた後で、バイトから始めて、色々転々としているのです。その時に出示せられた資料の中に、不登校の右肩上がりの理由として、無気力とか、無関心っていうような理由が結構な割合を占めています。で、その要因はなんやろうなっていう議論になった時に、無気力、無関心、あの子は学校に来られないなっていう、僕も小学校教員ですけども、学校に来ていないこどもっていう見方をしてしまっていた時があったなって。先ほどから、たくさんの方がご意見してくださっているように、学校に魅力がないので、行かないことを決めた。あの子は、学校に自分でも行かないこと。学校がもう、そもそも、魅力が全くない、という捉え方をしていけないとよくないなっていう話になっていました。あと、無気力、無関心っていうのは、きっと学校が生み出しているのだらうなと。こどもたちにそう無気力、無関心にさせるのは学校が悪いのだらうな、という議論にもなっていました。僕、久々に部落の教育集会所で教育担当もしていた時期がありまして。放課後、毎日部落の子どもたちが帰ってきてくれて、その日の学校の宿題を持ってきて一緒に勉強をする機会があって。で、なかなか宿題にこう、手つけられない、というこどもがいた時に、何したい、と聞くと、すごくザリガニが好きな子がいて、その近くに川があるので、で、ザリガニを釣りに行きたいっていう。ザリガニの釣り方、俺、こんなうまいこと知っている、という。それを僕は教育担当していた時は、ほんなら一緒に釣りに行こうか、という声かけができたんですけども、教室でなかなか授業に取り組めない子がいた時に、「何したい」って言って、「ザリガニ釣りたい」っていう言われた時に、僕が担任をしていたら、きっと同じ返しできていないのだらうと。そんなこと言うてんと、今、国語の時間だから国語しないといけない、と言ってしまっているのかな、と思います。公教育の場ですべての子どもの学びを保障するっていうのは、すごく難しいことやと思うんですけども、なんかこう、親や先生たちが敷いたレールの上をもう進ませている、と進ませて、持てる危険性を常にはらんでいるんやっていう感覚は持ち続けて、もし僕が「国語しなさい、算数しなさい」と言った時でも、この子はザリガニ釣りしたかったのだなっていうことは、常に頭に置きながら関わ

っていたらなって思いました。ありがとうございました。

【1日目まとめ】

協力者(新潟県) 私の方から今日の 1 日目のことについてまとめをしたいと思っています。その前に、私も今日さっき総括で喋りたかったんですが、皆さんが非常に多くご意見いただいたので、喋る機会がなくて、ここでちょっとだけ私が関わってきた学習会について話をさせていただければなと思います。明日も滋賀の方から学習会のことがありますので、明日に繋げればいかなと思っています。僕の住んでいる地域の学習会は、小学校が週 2 回、中学校が 2 回、全ての教職員が輪番で講師を務めています。教育集会場で行われているんですが、そこ、鍵を開けてくれる方が地域の方です。学習会にも顔を出してくれているので、そこで、教職員が地区の方と話をする、今置かれている現状について話をすることによって、子どもたちが学ぶ場であるとともに、教職員が学ぶ場にも なっています。で、なおかつ、地元には、上越教育大学という 教員養成の大学があるので、学習会の講師を上越教育大学の学生がつとめています。そこで、一緒になって学んだ学生さんが、教員になった時に、人権教育、同和教育について、またその広げていってもらいたいということで進められています。今、課題としては、小学校、中学校、生徒さんが少なくなっている、小学校は今いないのかな、中学校に 2 人ぐらいだったかなということです。やはり 1 度切ってしまうと、なかなか新しく立ち上げることが難しいと思っています。ですので、地道なことを続けていくということが大切なのかなと考えています。本日の 2 本の報告について少し話をしたいと思います。まず、福岡の報告です。自分の思いを抱くことが苦手で、学校休みがちの子に関わるようになって、学習会を立ち上げ、学校や地区学習会で生活綴り方に取り組むことによって、A や母親と繋がり A や母親の変容、担任と担当者としての思いや、これからの自分の学びについてのレポートでした。フロアの方からも、小さな 1 歩でも始めることが 大切であって、続けていく地道な取り組みが大切だとありましたが、それが 1 番難しいことなのかなということです。生活綴り方の中でも、こどものちょっとした変化や当たり前のような日常の様子を地道に家庭に伝えていくことで、家族が変わり、周りが変わっていく変容が見られてくる

ということでした。綴り方に関しては、綴り方に書かれている環境から、子どもが置かれている生活の現状が見えてきます。それを丁寧にとって、関わっていくことが大切であるということかなと思っています。地区学習会で学んでいった子どもたちがその後のリーダーとして成長していったほしい。明日の滋賀の報告にも、学習会で学んだ方がリーダーとして子どもたちの前に立っている、そういう報告がありますので、そこに繋げていければいいかなと考えております。奈良の報告は、年々増加傾向にある不登校問題に関してでした。担当した学級の生徒や家族に寄り添った報告となっていました。関わる中で自分の気付きの葛藤についての報告です。これまでの自分の生徒への指導、対応の中に傲慢さがあると気づいた報告者のことが語られていました。教員の意識の中に、私もそうかと思うんですが、自分はできているという傲慢さがあるのではないのでしょうか。今日話を聞いて、もう1度私自身が自分を見つめ直す機会となりました。フロアの方から学校に来られなくて、学校というのは教師が色々手をかけて関わってくれる場所ですが、もっと厳しい社会での中に入ってアルバイトができています。これには何か私たちが考える必要があるのではないかということです。学校や教員が窮屈になっている、そうなっていることは何が表しているのか。もっと楽しい学校づくり、安心できる学校作りをしていかなければいけないということです。学校スタンダードがある、スタンダードに当てはまらない子どもたちが不登校になっていく、こども同士のつながりを切ってしまうっていくということです。もう1度、私たちは学校文化を問い直していく必要があるかと思います。どんな居場所を作っていくのか、そういうことを明日の2つのレポートを通して、最後の総括討論で学校文化を問い直す、そして、こどもたちにとって学校が安心、安全、魅力のある場所、どんな居場所を作っていくのか、そういう面について、またと議論を深めていければと思っていますので、また明日のご参加をお待ちしております。

－報告3－⑩

互いに支えあえる探究活動をとおして（香川県同教）

－主な質疑と意見－

三重県 僕たちもいろんな人との出会いなどを大

切にしている、ちょっと意見っぽくなっちゃうんですけど、最初出会う前には必ず誰にどの話を聞かせたいのかっていう部分、誰と出会わせたいのかっていうのをものすごく意識しながら組んでいくんです。今回であれば、アイさんがこのインタビューシップを通して自分を変えたいと。ものすごいことだなんて思っていて、そうやって言うたら、ものすごくその取り組みが成功した。そこに多分お話を聞いていると担任の先生が別なのかなって思ったんですけど、その担任の先生の出会う前の意図であるとか仕組み等あったのであれば教えていただきたいと思っています。お願いします。

報告者 ご質問ありがとうございます。誰に合わせたいか。とても大切な課題の1つだと思います。本校のこのインタビューシップに関する取り組みに関しましては、必ずしも会員の先生が関わるとは実は限っておりません。時間割りが空いている先生が担当する場合もあります。しかし、その他の、この場合の先生は、のアイさんの、ちょっと、クラスの中での不安そうな様子であるとか、なかなかこう、馴染んでいけないような姿を心配して、もう4月の終わりには、その面談をしておりましたけど、すごく能力の高い子であるので、1対1で話す時には、いい答弁をしたり、発言したりするので、なんとか、1歩踏み合わせてあげたいなっていう気持ちはあったようです。このインタビューシップを立ち上げてくださった先生もこのフロアにいらっしゃるのですが、その担任の先生と連携しながら、どうしてもこの子は1歩踏み出してもらいたいと。踏み出して自信を持ってくれば、自分自身の成長にも繋がるし、学校全体の取り組みの方でもリーダー的な存在になるのかっていうことを話しまして、普段は、そのインタビューシップの方のこの取り組みは、夏休みに、4月からずっとこう、いろんな講師を呼んで授業を重ねていきまして、8月に訪問いたします。その時に、本当はこのインタビューシップというのは、出口を保証する、例えばパソコンに興味があるので情報系の中小企業に行けばいいじゃないのかとか、または、メカニックとか、自動車が好きなので、自動車関係の会社に行けばいいのいいじゃないのかっていうことではなくて、行ける範囲の地域にある、身近な、自分のおうちから通えるような企業を訪問いたしまして、大人たちの思いや仕事の仕方なんかを学んでいくという取り組みです。しかし、ちょっと話が

ずれましたので戻しますが、このアイさんに関しましては、やはり、こう 1 歩踏み出してもらいたいという他人の思いも強くて、こちらの方で、このリラクゼーションサロンを経営している経営者の方に背中を押してもらいたいと。私もこのリラクゼーションサロンの経営者の方に会ったことがあるんですけど、すごく前向きで、利益は当然企業なので追求するんですけども、本当に度外視して、自分たちの手で社会問題を少しでも解決していきたいんだってという熱い思いを持った方な方なので、その思いに触れれば少しアイさんも 1 歩踏み出せるんじゃないか っていうことで、この企業の方に行ってもらいました。その思いが通じたのか、アイさんはその経営者の熱い思いを受け止めて、私もやれるんじゃないかっていう心に火がついて、1 歩踏み出すことができたと思います。そういう話をしていると、その企業の訪問の中で自然と「じゃあ、あなたの信頼はどうか。どう考えているの」 っていうことになりまして。そこでまた 2 人の中で熱い繋がりというか、そういうものができるので、学校とは違う立場で真剣に働いている大人が自分の背中を押してくれるということ繋がっていきますので、本当に良かったなと。発表の最後の方に書いてあるんですけども、全員が全員ではないんですが、アイさんに関しましては 1 歩踏み出してもらえたなというは感じております。

奈良県 うちも昨日の綴り方の取り組み以外にも、補充学級につながる取り組みとして、このインタビューシップに似ているんですけども、ボランティア活動で 5、6 年生が放課後自主的に残って地域の人々と出会う。村の出身の子どもだけでは今はいないんですけども、地域の皮革産業ですとか、その他福祉施設等に行き、最後、年度末には自分のことを話すんですけど、必ずそこでは、その出会いで自分がどう変わったか、どう変容したかってことを伝えるということを主において発表会をしています。それに繋がる話が 今日聞けたなと思うんで、ありがとうございます。で、質問です。取り組み前夜の話になると思うんですけど、県立、特に高等学校の中で、こどもたちが、そのアイさんとかハルさんとか、自分自身がこういう課題を抱えている、いじめにあったとか不登校であったとか っていうような ことを先生は把握されているんですけども、それはどう、どういう繋がりですそれを把握するに至ったか、こども自身が語ったのか、そういったものを前任の中学校からお聞きになった

なのか、また、その具体的な課題について、この取り組みとは別にどういう迫り方をされているのか っていうのがあれば教えてください。

報告者 他校から転勤しました時にすごく感じたんですけども、本校はすごくその個人面談をする時間を取ってくれています。なので、自分は 2 年前までは学級担任をしておりまして、生徒と細かく話をする時間を、それこそ時間割変更して時間を取ってくださって 行ったことがあります。そういう何度も何度も教える中で、そのアイさんの方は すぐにでも、いや、実は他の方がなぜそんなにあの人の。なんでそんなキョロキョロしているの。もっと仲良くなればいいじゃないの、ということから、素直にこう話をしてくれただってという経緯があります。実はハルさんも一緒なんですけれども、私は、当然学校の人権主任として プラス授業も行っておりまして、あとは成果発表会後の準備、委員会活動の方でも関わっております。なので、アイさんとかハルさんに関しましては、私がインタビューをして、「今までどういう経緯でやってきたの」 っていうことを聞くと、素直に話をしてくれました。すごく自分のことをもうその頃にはわかっておりまして、人前で 発表する力がついたその時に、自分の言葉で相手のことを考えながら発言することができるようになったということも話をしてくれました。なので、比較的 1 対 1 で話す時には、素直に話してくれる子が多いのではないかな っていうのは思っております。ちょっと迫り方についてなんですけれども、実はそのインタビューシップというのはきっかけに過ぎなくてですね。本校は、2020 年度から三木町と包括的連携協定というのを結んでおりまして、三木町の方を中心としまして、地域の小学校、幼稚園などにインターンシップに 行ったり、またボランティアに行ったりもして活動を広げております。また、先ほど報告の中でありました通り、いろんな学校とか、またはどういう会の 会議の中でこういう発表しているんだ っていうことを皆さんの前で発表したりであるとか、たくさんいろんな場所で 発表とか活動をして いておりますので、教職員としましては、こどもたちの成長に合ったような環境の提供と言いますか、発表できる場を、活動できる場を提供してあげることに 主眼を置いてやっております。そういう経験を積んでいきますと、生徒たちはやっぱり自信を持って、当然、アイさんやハルさんのように、自分たちのできないこと、無理だなと思うところ

も把握し、良いところを出し、自己肯定感を高めながら成長しているんだなっていうのを私どもは実感しております。

兵庫県 今日のレポートの 1 本目はすごく良かったです。兵庫県では、2、3 年前に、就職することもたちに 統一応募用紙の在り方であるとか、差別面接は受けない、答えないっていうような取り組みがずっとなされてきて、それを通過した生徒が一部上場企業に就職した。その後、合格者の提出書類の中に非常に差別的な要綱を含んでいたというのを滋賀県の高校の先生が指摘してくださって、2 年前に宮のハローワークで徹底して登っていたその事象か、調査カードを全部抹消したということがあるんですね。現況なんです、今、先ほど 1 発目に 450 人いる生徒のほとんどが大学進学やと言われたけど、ほんまにそうかなと思ったんです。阪神間では定通制の学校がどんどん同廃合されて少なくなって、1 年時に辞めてしまう子がたくさんいるんです。そのきっかけで私はも卒業生とかに関わっているんですが、なんで高校一年生やと終わったのにやめるんや。もう学校面白くないねん。働く方がええって言いながらも、やっぱり働く時にやっぱ大事にしていけないといけないこと、送り出す側でしっかりして抑えておかないといけないことって必ずあると思うんで、もしもほとんど大学進学に行く中で、途中で辞めていったことが、大学進学できなかった子はいなかったんかって言ってんで、教えていただければありがたいです。

報告者 ご質問ありがとうございます。ほとんどの生徒が大学進学、これはもう事実というか、三高校の総合学科の方は多分、ちょっと言い過ぎかもしれないんですけど、全国でもその珍しい、その進学に特化した総合学科となっております。なので、先ほどの答弁でも話をした通り、この出口を保証するものではありませんので、あくまで人権的な進路保障、生きるための力をつけるための取り組みだと私は感じておりますので、このアイさんにしても、じゃあこの取り組みを見据えて自分の進路が決定して、職業につながったとは考えておりません。アイさんの話の続きをお話ししますと、インタビューシップによって、またはその委員会活動、それに繋がる準備委員会とかの中心になっていきまして、自分がその高校で、居場所ですよ、それが咲かせたっていうことをすごく嬉しく思っているんだってことを言うておりました。2 年生に

なりますと、その経験を生かして、今度はみんなでグループ探求をして、仲間とともに探求をしていきます。報告にあった通り、アイさん英語が得意ですので、その国際的な 取り組み方、何かないかなっていうので、最初は探求しようと思っていたんですけど、グループ内で話し合っ、結局はコミュニケーション不足による不登校生のことについて探究活動しよう、と決まりました。それこそ、かつて自分が経験したことを。本心ではあまりその点はやりたくなかったらしいんですけど、メンバーたちがぜひそういう流れでやろうぜっていうことになりまして、2 年生ではそういう形にしました。3 年生では今度再び個人探求に戻りまして、その 1 年生、2 年生での探究活動を踏まえて、実際じゃあ自分が一体どういう生き方をしたいのかっていうことを模索していきました。そこで、やはりアイさんの方は根本的なものに惹かれたのか、最後は国際的な目標にしながらも、自分が探究していく中では、その身の回りであるとか、または香川県、または全国、また世界でも話は広がりますが、居場所がなくなっている、橋作りがうまくできてない、そういった処置がかなり多いなっていうのを感じまして、自分は、自分もかつてそうだったので、少しでも居場所を作れるような、居場所作りに関われるような、そういった仕事がしたいとして、今は受験勉強に頑張っております。本校はほとんど就職することがありませんが、3 年生の人権ホームルームの中で最初に就職差別の問題を取り扱って、その統一応募用紙であるとか香川県の進路促進委員会の方が出されている冊子の中に、答えてはいけない事項というのがありまして、本籍地であるとか家族のことであるとか、当然、家族の財産である、そういうことに関しては、発言しちゃダメですよっていうことを、ほとんどが私どもの高校進学しているんですけども、そういった形で紹介して、みんながその大学を卒業する時に、就職活動する時にはそういうことも覚えて、先ほどの答弁とよく似ているんですが、自立した有権者というか、相手のことを考えて発言できる力をつけてもらいたいと思っています。本校のその取り組みとこのインタビューシップの力によって、将来就職する時にも そういったところを少しでも思い出してもらえて、そういう言動とか態度を取ってもらえたらいいな、と思って実施はしております。ちょっと残念ながら、その途中で辞めていった生徒に対してはなかなかそのケアまで行けてはない

んですが。私が赴任した時にちょうどそのインタビューシップが始まったんですけれども、本当にこう、来たばかりの学校は、下むいて歩いている子たちが多くて、おはようって挨拶しても何の反応もなく、ちょっと会釈するぐらいなのかと思うぐらいみんなだれてこう歩いている。授業も活気がない、そういうことが多くあって、勉強はするけれどもなってすごく思っていました。ところが、そのインタビューシップの取り組みが始まって、自分の生き方を、またはその自分を変えたいという取り組みを進めていくによって、生徒たちが変わっていったのは確実にあると思います。部活動で指導されて挨拶するというのはよくあるんですけれども、そういうのを全く感じないような子どもたちが、今では普通に、こっちがぼーっとしておいても、挨拶してくれたりであるとか、声かけてくれたりであるとか、そういう子が確実に増えてきているな、と思います。それはもしかしたら、インタビューシップだけの取り組みではないかもしれないんですけれども、先生方の粘り強い取り組みによって、子どもたちを支えていて、家庭訪問したりであるとか、保護者と緊密に連絡取り合ったりあるとか、そういった丁寧な指導をする先生が、確実にこう増えているなっていうのはすごく感じておるところであります。多分、話をしている子は一緒なのかもしれないなと思いながら、ちょっと先ほどの発言が、例えば、すぐ 精神的にしんどくなった子が、心の病になった子がすぐ次のステップに行けるように無理やり持っていくような、そういうイメージを持たせたことに関してはちょっと違うかな、と思っています。

福岡県 心配してたのが、企業さんにインターンシップとかに生徒を行かせる時にですね、その企業さんがどういう企業さんかっていうのがやっぱり結構 大事で。で、生徒さん、ちょっとホームページ見させていただいて、1 学年 150 人ぐらいおられて、その中で、総合学科が 7、80 人かなと思うんですけど、1 人に 1 社をマッチングされるって相当大変だろうなって思っていてその中で、一応と友の会の中で色々理念を見て精査されているって言われてちょっと安心したんですが、うちとかもインターンシップでこう、生徒を行かせたりするんですけど、その時の企業さんがやっぱり 働くこととか適性だけ見るんだったら、もうアルバイトすればいいだけなので。で、学校が紹介するっていう時に、その、その相手の企業さんがどういうところか

ってというのは常にやっぱり考えておかなくては行けなくて。うちの地域はですね、地場の企業が高卒の求人をする際に、ハローワークが必ず適正選考についてのレクチャーを一回受けに来てくださっていることになっています。その時に、高校の修学支援担当も必ず時間をもらって、不適正専考の発言とか質問とか、そういうものが生徒に与える影響とかですね、こういう理念がありますとか、違反質問された生徒のことなどをずっと話をさせていただいています。その結果、うちの地域の地場の企業さんは違反質問とかで上がってくることがここ数年ないんですよ。そういうところだから生徒インターンシップにも安心して送り出すことができるっていうのがあって。で、いろんな学校でやっぱりそういうして、インターンシップであるとか、この前はインタビューシップって言われていましたけど、そうやって生徒を送り出す時に、やっぱ企業さん、相手の企業さんのことを知って安心して生徒を出せるっていうところを 1 つ思っておかないと、人権的なところでとても傷ついてくる生徒がいたりとか、もしくは企業さん自体が とてもブラックだったりとか、いろんなところがあるので、そういうところはやっぱり私たち教員として考えていかないといけないな、と思っています。

－報告4－⑫

「だから私、学校行かんやったんよ」

(滋賀県人教)

－主な質疑と意見－

福岡県 報告ありがとうございましたとても元気の報告だなと思って嬉しくなりました 5 年生の子どもたちが落ち着かなくて、先生もどうしようかなと思われたと思うんですけども、その時に一人ひとりの子どもたちの思いを受け止め、黒板に書いていくっていうことはお互いに一人ひとりクラスの友だちがどう考えているかそれはお互いがわかることですよね、だから、子どもをつなぐことなんだと思ったんです。うちの学校でもなかなか落ち着かない学級があって、担任の先生は一人ひとり今このクラスのことどう思っているっていうのを子どもに書いてもらったりしていました。でも、それは担任と子ども、子どもたち同士はお互いのことわからないそういう状況でした。けれども黒板に書いて子どもたち同士を繋ぐことはできるん

だけれども、それを自分の本音を子どもたちがこう出していくことに対する不安や恐れ、学級が落ち着いてなければやっぱりそこに本当に出していけるんだろうかっていう報告者がそこに踏み込めたから、一人ひとりの子どもたちがきっと自分の本当の思い出してくれた。でも、こどもたちからすると、出しても大丈夫だっていうものがないとやっぱり出せないと思うんですね。でもそこで先生がそうやって、あえてそれを求めて行けた、行ったそこには何があったのか 確信があったのか、そこらあたりのこと少し聞かせてください。

報告者 いくつかこうやったなと思うんですが、話す時にちょっとルールを決めようって言って、安心してお互いが言えて、聞けて、というのができるように誰かが喋ってる時はこしょこしょ話したりとかこちょこちょこう違うこと言わんとこって、話してる人の目見てまず聞こう、でその人が話し終わるまで聞き切ろうと。すぐにはそれもできないんですけど、こうだんだんだんだんできるようになってきたっていうところなんです。さっきの確信の部分なのですがこれはやっぱり小五合宿で地域の人の話を聞くときに、よく聞きやったんです。持続性はないんですけど、私の正直な思いとか、生い立ちとかこどもの時に感じていたことも正直にもう時には泣きながらとか、喋るようにした時に、ぐっと聞いてくれるので、大丈夫って私も確信を持って、なんかすっごい熱いものを持った小学校のこどもたちなので大丈夫と思ってやっていきました。そしたら面白いのがこの間小6合宿でもこの高1の子たちに先輩からのメッセージっていう枠で話してもらったんですけど、「あんな、みんな本音で言えている」っということをして6年生のこどもたちに言うてくれて。「私らこういう喋ってきたんよ。最初はやっぱり不安やった。でもなだんだん目見て話聞いたり言ったりしていたら、安心できるようになるんよな、そういう友達になっていったほしいな」っていうこともすごく喋ってくれやうて。去年のこの子たちの中3合宿で、「何したい」って聞いたら、なんか昔みたいに円になってみんなで喋りたいって言って、一人の子が、「私はいじめやうて」って言って、泣いたけど、この子を責めるんじゃないくって なんでそうなっちゃうんやうなうていうことをみんなが喋っていった なんかすごく温かい時間を過ごすことができたんです。

三重県 うちも多くの地区を有する学校で毎週地区学習会をしているんです。僕が赴任する以前に

今は地区の子たちだけで地区学習会をしているのですけど10年20年前には、やっぱり地区以外の子たちも一緒に学習すべきじゃないかって言って地区に関係なく、うちの学校の子たちみんな学習していこうと学級全員で放課後に市民館の方に行つて学習をしているっていうことがあったんです。そうした時にあの地区の子たちが自分たちの地域に対して差別する人がいるんだっていう思い、この地域の中にもいるっていう部分を話したいけどその地域の人たちっていうのが言ったら一緒にそう思いたくはないけど、他の地区に住んでいるクラスメイトになるかもしれない、と感じた時に、もちろんその学校の方でそういうことのないようにっていう取り組み等は進めていたんですけど、やっぱり話しづらいつていうようなことがあつて、今はまた地区の子たちだけでつていうことではしているのです。だんだん年数と共にこどもたちの数が減つてきている現状もあるので、そこら辺また考えなきゃいけないとは言われているんですけど、こどもたちがその場でやっぱり話しづらいつてか、本当に地区のことを話すときに地区の子たちだけで話したいねつていうようなことないのか、ぜひ聞かせていただきたいです。

報告者 なんかすごい本音ですよ。地区の子たちのその思いも含めて受け止めていきたいなつて。今は出てないですが、そこも出たらもちろん受け止めていきたいな、と思ひながら、今聞かせていただいていたのと、やっぱり(差別を)する側の立場の人がどれだけ、一生懸命受け止めてくれて自分のこととして考えてくれるか、そういう姿があることでムラの子たちで安心して自分の本音の思いを言えるようになっていくんじゃないかな、つていうのも感じています。私たちの学校では人権学習のことを「せせらぎ学習」つて言うんですが、今回小6合宿の4人の子が、実は参加できなかったの、人権劇の内容を全部動画にして、もう1回クラスの中で、「せせらぎ学習」としてやうてつています。その中で、ムラの子じゃない子が、「最初せせらぎやうたことはそれだけの話やうて思つていた。でも、やうていくうちにこれは一人ひとりがどう生きるかのことなんやな、つてなんか少しづつなんやけどわかつてきた」つていうことを振り返りで書いていてくれて、どう生きるかなんやなつていうことも常々みんな確認して、その問題に対する自分の意識や姿勢が人を励ますかもしれないへんし、一方で、傷つけてしまうかもしれん

よなっていうことも今みんなと一緒にこう考えている途中です。

奈良県 こどもたちの本音を出し合ってそれを共有してっていう取り組みをされていたのはいいなと思ったんですけども、そういった取り組みを続けていった中での集団としてその学級がどういう雰囲気になんか変わっていったとかそういったところが あれば教えていただきたいなと思いました。例えばその A さんが「わからんことがあんねん」っていうのを友達に言えて、それを友達が教えるそんな場面があったのかどうかっていうのが 1 点で、もう 1 点は中学校になってからの話でエーさんがその学級の中での人権的なことでちょっと許さない、でも言えない、とかあったんですけど、それになんか学校に行けなかった。けれども、3 年生の頃にはもうほとんど行けるようになったその中では中学校の先生が取り組まれたその仲間作り、本音を言えるような 繋がりがつつ取り組みがあったのかなっていうところも教えていただきたいなと思いました。

報告者 集団としてっていうところと個人の変化っていうのも重なっていくんですが、自分勝手とか自分の都合ばかりとか他の人はもうどうでもいいみたいな雰囲気が徐々に徐々になくなってって、ほっとけないという雰囲気が出てきたところもあるし、学習に対してかなり前向きになってくれました。特に 6 年生、もう去年と全然違うなっていう自分らもそれをすごく実感していて、本音で喋るとか自分の思いや考えを伝えるっていうことは他の教科でもずっとやってきたんです。物語文を読んで感じたこともそうやし 算数の思考過程を考える時もグループ学習とかペアで、ということも自然にできるようになっていったので、学校生活っていう面でも変わっていったかな。中学校に行ってから A の姿なのですが、また後でちょうど元担任の先生もおられるので話していただこうかなと思うんですけども、A が「なかなか担任の先生も途中から自分の弱いとことか、本音とかこう自分ってこうなんよっていう話を A に言ってくれたんよな。なんかそこから A に心開いてくれている、と思って A も喋れるようになっていったんやな」ってちょうどこの 3 月に言っていました。そういう 1 人の人としての繋がりがっていうものがまた A を支えていたのかなって思っています。

滋賀県 2 年生 3 年生でこの A さんを担任していました。今、現在は地域総合センターで勤務させて

もらっています。いろんな立場で寄せさせてもらって、たくさんのことを学ばせていただきながら、日々過ごさせてもらっています。今もお話あったんですけども、中学校は、2 つの小学校から上がってきたこどもたちがいます。それぞれのしんどさを抱えながら学校生活に来ていました。その中ではなかなかその人間関係のことですとか、お家のことですとか、本当にいろんな課題を抱えながら来ています。私自身も 2 年生を受け持った時、本当に日々向き合いながらしんどかったスタートがありました。本当にいろんな言葉を使ったり、ひどいことで周りの子たちを傷つけたり、それは私に対してもあったのかな、と思っています。それでもなんとかこの子たちのことを信じて、ぐっと待ちながら伝え続けたのが、おそらく 3 年生中盤から後半にかけて、この子の進路のところで本音と向き合いながら書かれたのかな、と思っています。本人自身 10 月の三者懇談会があってそれまでなかなか来られていないこともあったんですけども、私自身も中学校から高校に上がって高校 2 年生 3 年生で、学校は行けてない時期があったんです。けれどもそういったところを本音で語るじゃないですけど、気持ちを伝えながら接しました。この子にもう届いたかわからないですけども、この子が決めた 10 月 11 月は遅刻することなく学校に行き続けてくれたので本当にそういったところで支援協力できたかな、と思っています。

大阪府 本当に先ほどからの先生がまずは自分をさらけ出してであったりとか生い立ちを語ってっていうところで、私自身も大阪羽曳野の向野という被差別部落で育ててもらいました。先生も子どもたちと何が出来るやろう、ということとされていることっていうのは本当にありがたいことだなと私自身もできることっていうのはもっともっとあるんじゃないかなと思って反省も含めて聞かせてもらっていました。この A さんの話にもあるようにやんちゃもしてる時期ありながらも、やっぱり学校には来ていたにも関わらず、その A さんが学校休むっていうのはやっぱりすごくその中で居づらいものもあったかもしれないいろんな葛藤があったのかなと。私自身も中学 2 年生の時に本当にあのモノクロの世界になって、今やったらひょっとしたら行けてなかったんじゃないかなと思います。当時母親がすごく厳しかったんで行くことにはなったんですけど、どなたかが定義されていた「そのクラスに入る」っていうことに関してなんかこういう力

がついたからクラスに入ったんです、って何々ができるようになったからクラス入れるようになってなんか頑張らないと入れないというのはやっぱりちょっと考えないといけないのかなってところで、やっぱりそういうことも自身は別に特になんも変わっているわけじゃなくって その教室自体が頑張らないと入れない場所になってしまっているじゃないのかな、と考えていました。子ども自身はやっぱり話して聞いてほしいっていう根本的なところは変わりはないのかなと思うんです。ただその他の授業で面白いことしたらいいというわけじゃなくて、子どもが求めている面白っていうのは子どもと子どもの繋がりであったりとか、自分の意見はこうや、いやでも自分はこうやっていうそのやり取りなんじゃないかなと思うんです。それは別に新しいことじゃなくって今までの先輩の先生方がやってきたことであったりとか、子どもと一緒に帰るであったりとか、一緒に木登りするとかそういうところから来るものってすごく大きいのかなと思うんです。ただお家にいても外の世界と繋がれたりして間接的な面白さっていうのはすごくあるのかなと思うのですが、学校に来てみんなとこう繋がって直に会える気遣いであったりとか繋がれるっていうことが大事なのかなと思っていました。ただ、その休んでいる期間っていうのは決して無駄ではないですし、本当にこの進路保障っていう部会で言うとその休んでいる期間さえもその子の将来 10 年 20 年後に繋がってくることなんかなと思うので、それを踏まえた学校へ行かないといけない、というのと言わなかったじゃなくて言えなかった、それもその通りやと思うんです。それは何もせずに言っているんじゃないかって考えて考えて考えた上での結果であれば私はそれでいいのかなと思うんです。そういったことを学ばせてもらったので、また戻ってから自分自身もう一度原点に立ち返って色々やっていきたいなと思いました。

奈良県 希望して母校に戻ってきているから何しているのっていう問いがあったのは同僚からですよ。これは励ましですかじゃないですよ。それで質問なのですが、その前に、学校って子どもがいて先生がいてそれをとりまく保護者がいて地域があって、この取り組みですごいなと思っているのは、卒業生がそこに加わってきているんですよ。これは本物になるなっていうか、継続するなっていう素敵さがあるなっていうことも思いました。

あの先生の周りで言うてる先生が、先生が転勤してこられた時にどこか冷めた目でちゃんとやってやみたいな、地域と一緒に頑張って動きを作っていた学級づくりをやり直したことで、周りの先生どうなっているかと思うし、そのような状態になっている原因を先生はどう分析されて、そこから取り組みをどう作られたのか。発信が中学校の先生からどうされたのか、生徒たちがどうだったのかを教えてください。

報告者 周りの先生たちは手のひらをひっくり返したようにもうもうほんまに変わって、6 年生の担任になってからはなにも言われません。なにも言えない、というか、すごく肯定的にクラスのことを見てくれやって、やっぱりこの見えるもので評価する。でもそれって違うよなっていうことをその後喋っていきました。なんか 1 番最初に 4 月赴任して大型のテレビを 1 台クラスに置くっていうことでも、壊したらどうするのか、みたいな話になって「お前のクラスやぞ 1 番壊しそうなんは」。私は、やっぱり子どものことを信じてなかった、というところが子どもをしんどくさせていた環境になっているんじゃないかなと思っています。この学校は、低学力と地域のしんどさとみたいな感じはあるんですけど、そこも私はなんとか変えたくて、母校に戻りたいなって強く思って志願したんです。私も表面的に焦って、「じゃあ今とりあえずなんとか納めたらいいわ」みたいな場面がしんどい時になかったかなって振り返ると、どうしてもあったんやろなと思います。だから、やっぱり待たなあかんっていうこと、自分の失敗、子どもに対して申し訳ないことをしてしまったという気持ちも含めて発信していけばいいなと思っている。中学校の先生とも結構交流があるんですけど、多分中学校の先生もいっぱいいっぱいしてくれはった中で、なかなか変わっていけなかった現状もあったのかなっていうのも感じています。

【総括討論】

福岡県 学校の置かれている状況もあるんですけど、教職員が置かれている状況もあります。それと、前任校の話ですけども、若い教員が毎年のように新採で赴任してきました。高学年の担任になるんですけども、1 人の先生はなめられたらいかん。威厳のある教師ではないというか、ものすごく力が入って、子どもと距離ができてしまいました。もう 1 人の先生は、学級崩壊が 1 番怖い。だから厳しく

せんといかん。ちょっとでもこどもが違うことしたり、授業中に笑ったりすると、それが広がっていくんじゃないのか、ものすごく肩に力が入って、学級経営をやっていました。保護者から「私の娘は、先生から心が離れていってます」という指摘を受けます。でも、やっぱり自分と自分のこどもに対する向き合い方が間違っていると、間違っていた、というふうに思い直して、そして子どもとの向き合い方を変えてきました。こどもの話を聞こうと、思いを受け止めて、同時にムラの保護者の思いを受け止めようとクラスにいたんです。けれど、その中で、後に話したその若い先生は、「今でも部落差別があるんですか」って私に聞きました。地元出身なんです。炭鉱、旧産炭地で被差別部落がたくさんあります。だから、当然、部落問題学習はやってきているはずだけれども、彼はそう言いました。1 つ 1 つ一緒にやっていったんですけれども、その先生がですね、部落の人たちはかわいそうだと思える、その意識が変わらない」と言ったんです。6年生の部落学習するのが怖い、でもやっぱりやらなくてはいけないという思いはあるんですね。自分がその若い先生にできることは何やろうかって考えて、うまくいなくてもいいと、最初から立派な授業をしようと、こんなこと思わなくていい。こどもの実態を知っているのは、あなただから、一緒に授業つくろう。自分ができることは。それと、もう 1 つだけ。部落は差別されるかわいそうなところはない。そのことをその本人にわかってもらうために、いろんな場に、その先生と一緒に行きまし、いろんな方の話と一緒に聞きに行きました。校内研修もやりました。自分がやったことはそれぐらいです。でも、その先生、自分が変わらなくていいんっていうところに本当に気づいてくれて、一生懸命やりました。うまくいかなかったらごめんなってこどもに謝れるようになりました。自分も間違っちゃったよとか、先生こようわからんというだけで、一緒に自分も勉強してくるから、「この次の授業の時に答えられるように勉強してくるけん、待っとって」、そういう言えるよねって僕は思いました。みんな変わるなって。教師が変わればこどもが変わるって言います。4年生、5年生、6年生で、その先生は担任を持ち上がったんだけど、本当にクラスの仲間のことを全然信じるのができなくて、放課後残ってそのことを言ったりして、ずっと話をしたんですけども、6年生の部落学習の終わりにですね、ある子が感想の中に書きまし

た。僕は部落出身です。なんで書いたかいうと、この先生やったら受け止めてくれると思った。この学級やったら言えると思う。今日の論議の中に、報告の中にありました。信頼です。クラスの仲間を信じてなかった。でも、本当に信じてなかったんではなくて、信じたかったんです。

信じたかったけど、信じることができなかった。その子が最後にそうやって言いました。うわあ、人は変わるんやなっていうことを若い先生から、またこどもの姿から教わりました。

福岡県 実は私、小学校 5 年の時に、ムラに解放同盟の地域協議会ができました。ムラの大人たちには、絶対に近づくなと言われました。私は卓球とか、図書室だけには言っていました。ずっと、その地域で解放歌を聞く中で育ってきました。でも、その間ずっと、また学生も含めて、自分の立場を一生懸命隠してきました。解放こども会のある学校に赴任して、そこでのこどもたちの姿とか関わる先生たちの姿を見て、初めて同和教育に出会って、その素晴らしさに気づくことができました。2校目にも解放こども会があって、かなり学力的に厳しいこどもがいたんですけど、その子たち、高校に行っても、周りのこどもたちが退学しても、その子はずっと 3 年間卒業まで続けることができて、今 40 歳になるんですけど、この間久々同窓会があって、解放こども会どうやったときいたら、本当によかったという。だから、今、自分の家族でも話すし、周りのこどもにも自分の立場を話すよってというような話をしてくれました。そういう思いを、ずっと来ているんですけど、今の学校では、16 年前になくなって、でも地域にはたくさんいるんです、こどもたちが。で、そのこどもたちが放置されている状況をなんとかしたいという中で、あるお母さんが、うちはみんな支援学校に行ったので、どう関わっていいのかわからないと何度も訴えてきて、地域の運動はかなりこう停滞しているんですけど、被差別部落の方に相談して、始めました。そういった思いはあるんですけど、なかなかまだささやかな状態で、滋賀の地域みたいな、すごい地域の支えがあつての取り組みはできてないんですけど、目標はそういうなところに置きたいなと思っています。で、今、その子ども会に来ている、学習会に来ているこどもの姿なんですけど、中 1 のエー君が今中 1 になっています。で、そこにその村の高校 2 年生の女の子が関わってくれています。その出会いがを作ってくれたのが、福岡県教委主

催のチームラボ 2024 です。その辺のところをちょっと担当の方に話していただけたらと思います。

福岡県 皆さんのお話、また実践報告から自分にできることは何だろう、なんだろうかと考えながらも聞かせてもらいました。昨日の 1 本目の A さんに「チームラボ福岡 2024」に来ていただいている関係で話をさせていただいていただきます。ワークショップを通して、今まで自分が気づかなかった人権、また社会の中にある差別に気づく。そして、差別をなくしていきたいという思いを自分たちでなくすことができるという自信に変え、行動、発信につなげる。4 日間これを実施しています。そして、4 日目には、実際にグループでも発信するという演習で、対象は中高生、教員になるのですが、今年度から A さんと、今お話 していただいている築城町の先生方に来ていただいております。本当にその A さんと A さんの中学校の先生たちには参加をしてもらって、そこで色々学んで もらっているんですけど、私は、A さんのこれまでの背景、そして先生方の関わりの大きさ、地域とのつながり、その思いの強さと行動があって、A さんの参加が今あるんだっていうのを強く感じています。A さんは風邪をひいていたんですけど、参加して意見をしっかり述べていました。また、1 回目の時にはあまり話せなかった同じ学年の別の学校の子もいたんですけど、その子とも仲良くなり、またこう今話題に出た同じ地域の高校生の人とも同じグループになって話をする姿がありました。私としては、その参加、子どもたちが来たいと思ってくれたこと、そして行動発信に繋げていく姿、またこどもたちの繋がりなど、大変嬉しかったんですけど、やはりそれができたのは、これまでの先生方、地域の関わりがあってこそだと改めて実感しました。ここから私は、この参加ということを発信、行動につなげるということ一つをとっても、日頃や当日まで、私自身もできることがある、また、自分にもつなげていきたいことがあると、何かを行う時の自分の視点の広がりもさらに感じております。

兵庫県 もう最後の大会になると思うんで、ここだけは言っときたいなと思うことがあります。私が小学校 4 年生の時に母親に部落って何って聞いた時、そんな難しいことは学校の先生に聞いてみて言われました。で、小学校 4 年生の担任の先生。「先生、部落って何」って聞くと、「あのな、お盆に水入れたら平らになるやろ。そういうことや」。

何のことやさっぱりわからないままで、それが知りたくて高校、大学と 部落研に入りました。で、教師になるための教育実習に行く前の授業で、大学の先生が同和地区のある学校に実習に行くときは気つけなあかんで言われました。片田舎から 80 分も 90 分もかけて大学に通っていたわけなんですけど、もう頭に来て。全国から集まっているが、やっぱりその先生の言うことおかしいやろ。これから教師になっていくっていう学生にそれはおかしいだろう、というところから、自分の解放運動が始まったんですが、運動する中で、自分が結婚差別に遭います。その時初めて「母親になんでこんなところに産んだんや」と言ったら、母親が違う部屋で泣いている声が聞こえてきました。「あ、しまった」と思いながら、何日か経っていくうちに、「お母ちゃんはどうやった」って聞いたら、実は自分も結婚差別があった。警察官と一緒にいる、もう花嫁道具も入ったっていう時に、一旦養子に出て結婚相手になってほしいという申し出が向こうの親からあって、うちの母親の父は、もう 1900 年生まれの祖父は、「そんなことまでして結婚せんで」と言って、10 日以内に 10 人兄弟の長男と 見合い結婚して一緒になったそうです。当時は「女が学校にいったら不幸になるんや。学校行かんよ」と言うとった祖父が、母を高等女学校まで行かしているんですね。でも、高等女学校に行ったら、仲のええ本を貸し合う友達がある。1 冊の本だけは回してくれん。それが破戒や。この本読まん方がいい。「なんで」って聞いたとき時に、後で気づくんですけど、母親のことはみんな知っていた。「解放令」なんてふざけた名前で太政官布告が出て、その翌年に「戸籍法」が作られて、壬申戸籍は昭和までずっと見放題、垂れ流し状態。2016 年、部落差別解消推進法ができて、もうあれからもう何年も経ちますよ。その年に部落探訪の事件っていうのは起きている。部落探訪っていうのが YouTube に流れて、差別にあうものが出てきて、私それ知りながら何にもようしなかって。200 人規模の大学の学習会の時に行った時に「本人通知制って知っていますか」と聞くと、手を挙げたのは 3、4 人だけでした。教師自身も本人通知制っていうのを知らずに来た。でも、8 つの資料については、もう警察官も社会福祉士も公務員もみんなその情報を得て流していたっていうことがわかって、私、しんどいなと思いました。自分も出身を隠さないで生きていたらぶつかることがあって。私、今日報告の

中で、笑顔でこう対応されているのを見て、いつかしんどくなった時に、やっぱりその先輩頼ってほしいなと思って聞いてました。私がそうであったように、起こした人間の責任です。頑張れって言ったら頑張れって言ったもんがせなあかんしと思うし、私にしたら 23 の時から 70 まで全同教に関わって、ちょっとこれ以上は母親の介護のこともあって、もう捨て置けないので、今年最後の参加になるんですが、やっぱり「破戒」は「破戒」であって、まだそれ超えてないなという感じがします。で、それは今、会場に随分と若い先生が増えてきたこと嬉しく思うんですが、その人たちがやっぱり引き継いで、全国に散らばって種を撒いてくれることで引き継がれるんだろうなと思って聞いていました。今日は報告ありがとうございました。

福岡県 今日はちょっと家族でやってきました。ずっとレポートを聞きながら、やっぱりムラって素敵だな、というのが私の感想です。同和教育って本当に素敵な教育だなと私は思います。これがこの地元の大牟田の先生たちにどれだけ伝わるのかなというのが本当に私自身の課題。本当に私はムラの人に出会いながら、ムラと関わりながら、本当に素敵な出会いをさせてもらって、今もその中にどっぷり浸かっています。大学の時、昨日もお話したんですが、私はこの大牟田で差別的なことをたくさんしてきました。同じクラスにいた在日の子と一緒に「ちょうせん」って言って笑って過ごしました。それから、「あそこの道通っちゃいけんよ」って言われたところを、あそこは怖い人がいるところなんだとか言って遠回りをしてきました。その学校に今勤務しています。あとは、いろんな差別のことを知らずに、悪さする人は、障害児学校、学級なんだという刷り込みの中で、大学になって初めて部落と出あって、こども会に関わるようになりました。ちょうどその頃、狭山の同盟休校とか、棄却とかの時期でした。一緒にこども会の子が同盟休校とかするとかいう中で、子どもたちに「姉ちゃんも僕と同じ」って聞かれました。つまり、同じムラ出身なのかって聞かれた時、答えようがありませんでした。それと、ムラのじいちゃん、ばあちゃんとか、お母さんたちが、「学生はいいよね。学生終わって地域に帰ったら、もう部落問題なんか関係ないっちゃろう」みたいな言い方をされて、そこで自分が今後教員になって何をしたらいいか、というのを本当に考えさせられました。今も「姉ちゃん、僕と同じやろ」っていうのはずっと脳裏に残っ

ているし、学生さんはいいよね、いつでも逃げられるよね、部落問題からって言われたのがずっと心に残っています。今日話を聞いて、本当に私はムラって温かいなと。学校で切れたことも、学校で窮屈していることもがムラに行ったら、ムラのお兄ちゃん、お姉ちゃんが自分の生い立ちのことを聞いてくれる。休める場所がある。私は、ムラのこの文化っていうの、ほんとに今後も続けていって、ほんほんとに 1 人から 2 人から、本当に地域に残された、本当のなんか小さな教育の場であるし、なんか私たちが大事にしなきゃいけないものじゃないかなと思います。教師としては何ができるのかっていうこと。昨日もお話したんですが、私はやっぱり、クラスのこどもと同じ時を過ごす、同じ地域に育つ、同じ空気を吸う子どもたちをやっぱりつなぐってというのが教師の仕事だと思います。それを丁寧に、次に中学校に、高校につないでいくってというのがやっぱり教師の役目だとの思いで、私は、ずっとこどもたちに自分の思いを綴らせて、語らせてきました。今、特別学級を持っているんですが、多分、普通学級で弾かれたこともです。クラスの中で、書くのが苦手なんです、「おしゃべり拾い」でいっぱいおしゃべりを聞いています。その子が喋ったことをずっと書き下ろしながら、彼が心に抱えていること、学校のことを、家でのことを、ずっと、毎週書きなぐっていく作業をこどもと 2 人で一緒にしています。それを交流学級のこどもたちに返しながらして仕事をしている。班ノートを回して、不登校のこどもに声をかけ、どうやって声をかけようとかいう班での繋がりをつくり、あとは、自分のことを書いた時に、「先生、これをみんなに読んで」とかいうようなこどもに育ててきたつもりです。というのは、やっぱり喋れる、聞いてくれる相手がいるからこそ書けるのであって、そういう学級経営をしていかないと、子どもたちは書きはしません。そのためには、自分も丁寧に自分のこと語りながらじゃないですが、ちょっときつい時もありながらも、なんか自分のこどものこととか、いろんなこと話しながら、こどもたちと繋がっていきました。特に障害のある子どもたちは地域の中でしか生きていけないので、やっぱり地域との繋がりがってというのが 1 番大事です。1 人の教員としてではなくて、地域に生きる 1 人として、子どもたちを長い目でみんなで支え合うっていうか、そういう温かい教育を若い先生たちに、「あったまるよ、土日大変だけど心あったまったよ」っていう

のを伝えていきたいなと思います。

【2日間のまとめ】

協力者(鳥取県)

3 つ思ったことで、1 つは力っていうのをどういふに捉えているのかってところが大きなテーマだったかなと思っています。学ぶ力、未来を切り開く力、つながる力、自分の意見を伝える力などたくさんの力が話されました。この力は誰が求めているのか、誰のための力なのかってところを私たちは問わないといけないんじゃないかなと思っています。協力者からコミュニケーションをすごく過度に求められるってことをお話されたけど、うちの 3 年生の生徒が、就職の時に科目で 1 人でいつも本読んでいる、なかなか友達と話すのも苦手な生徒に、就職試験の時に明るく元気ってようなことを話してしまう、俺は何をしているんだろうって僕らの先輩の話がありました。なんかその生徒が進路実現のために何か力を、というように思っているけど、その生徒の思いなしに、こっちの持っている、こっちっていうのは多分人材としての 社会が求める力みたいなのをこどもの願いを超えて伝えている。俺は何しているんだって僕らの先輩と議論したことがあります。無力さを感じたこともあります。不登校の生徒に対しても焦りや心配があるのが、実はそれは生徒の願いとか本心を捉えきれていないのではなくて、将来が心配みたいところで心配をしているんだったら、経済中心の社会や地域に貢献できる人材みたいなのを思っていて心配しているんだったら、そこには大きな課題があるし、丁寧に議論していかないといけない。力っていうこと、あるいは成長ってところを丁寧に議論していかないといけないってことを 1 つ思いました。次ですけど、学習会っていうのも大きなテーマだったかなと思っています。学習会がどんな場所か、学力保障、進路保障を思うと生徒児童のためなのだけけれど、この 2 日間の議論を聞くと、実は私のため、そこに関わっている私がその学習会ですごく力をもらっているんじゃないか。鳥取県では地区進出学習会って言います。教員が地域に学ばしてほしい、子どもに学ばしてほしい、保護者に学ばしてほしいってことで、地域に進出していきました。そこには、子どものためではなくて、教員が学びたくて 進出してきました。そういう意味では、家庭訪問も、その子とか家庭のためじゃなくて、その、なんか自分のため

ってところがあるのではないかなと思っています。学習会には、「共に学ぶ、共に育つ場」という意味がすごくあるんじゃないかな。地域も家庭も、生徒も教員も、そういう人権、文化の拠点が学習会になってことを確信する、そういう話がいっぱいだったかなと思っています。そこに私が行きたくていくって主体がいるんだなってことも感じました。3 つ目なんですけど、クラスの差別をスルーしている状況があるって滋賀県の報告のところに、そこは見逃せないって 3 人の話が出てきました。実は反差別の生き方をしている人が少数なのではないか、いろんな意見の中でそれが出てきた。60 人の教員がいる中で、半分以上はなかなか自己開示の話ができないとか、そういう話が聞こえて、実は反差別の生き方ってというのは、この場ではみんながそういう気持ちだけど、各職場に戻れば少数なんじゃないか。若い先生、若い先生ってあんまりあれなんですけど、すごくぶつかりを持って考えている。で、ここでいろんな話をしてくれて、すごく心強く温かな気持ちになったけど、職場で 1 人で闘っているんじゃないか。そういう少数なところをどうやって広げていくかってところも大きな課題だかなと思っています。1 つは、こどもたちの思いを明らかにするってのが大切だかなと思っています。自分が我慢すればいいんだ、心配かけたくないって香川の高校生の話だとか、最近、警察を受けた子が、「お家の人は警察になることを賛成してくれますか」って質問されたんですけど、「これは僕らの能力と適正とは絶対関係ないと思います」って言って来ました。そこで賛成したら警察官になれて、賛成じゃなかったら不合格かもしれないとしたら、おかしいよなって言って、「じゃ、ちょっと問い合わせするけどいい」って言ったら、「もちろんお願いします」って言って、警察に問い合わせました。そういう生徒の思いを受けた時に、差別関係を明らかにしたりだとか、こういう世の中になりたいよねって展望を話したりだとか。そうやって、一緒に考えていきたいってことが 1 つかなと思いますし、私たちの反差別の生き方ってこうだよねって同意形成もすごく大切なことかなと思っています。綴り方学習会ってのも、すごく皆さん丁寧に説明してくださって、すごくありがたかった。初めて聞いた方もいらっしゃると思います。75 回の歴史があると「知っているよね」って部分で、なんか正しさが固まっちゃうっていうか、そういう部分もあるのかなと思っ

ています。ある組合の学習会で、「部落って集落のことですよ」って若い先生が言った時に、「いやいや」とみんなが言ったんですけど、その「部落って集落ですよ」っていう意見、すごく大切です。人権が分かっている人だけの話になっては絶対いけない。例えば、昨日の「手短」とか「鉄砲玉」っていうのも、しっかり僕が話できなかった未熟さがあって、それは言っちゃいけない言葉ですよってこと。伝えたいわけじゃなくて、それがどんな差別関係があるのかみたいなところを丁寧に丁寧に議論する場がこの場だと思うけど、そこが力不足もあって、伝わり方はどうだったかなって反省もあるんです。そういう私たちの同意形成を皆さんが丁寧に丁寧に話してくださって、すごくこの場が学習の場として安心できて、少数かもしれないけど、各職場で頑張ろう、各自分の場所で頑張ろうっていう気持ちになった会だったなと思っています。この場も、綴り方のような、自分を見つめて振り返る場だったし、学習会のような繋がる場、力をもらう場だったと思います。ただ、自分らしくとか、ありありのままっていうところに反する人材育成みたいな、社会の要望みたいな、そういう考えもべったり知らぬ間に身についているってこと、内在化しているってことも事実ではないかなと思います。その中で、自分を振り返ることとか、議論することっていうのを丁寧に丁寧にしていって、また同意形成をしていけたらなと思っています。